様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２３５０３
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３４０２０５８

研究課題名（和文）長期に渡る戦乱・紛争による心的外傷の実態とその残存に関する調査研究

研究課題名（英文）A study of an actual trauma condition and persistency by a long term war and dispute

研究代表者
文珠　紀久野（MONJU, Kikuno）

山梨県立大学・看護学部・教授

研究者番号：７０１９１０７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、戦乱と紛争の中で受けた心的外傷が、成人後の心理面に及ぼす影響を調査し、最近頻発している暴力、無気力、対人関係に関する種々の問題との関連を明確化することである。戦乱被害者を対象とした半構成的個別インタビューと心理的内面把握のために箱庭制作を実施した。支援者養成のため、2011年度から毎年継続的にワークショップを企画し実施した。その結果、生活状況の改善が見られつつある対象者は、健康状態の回復が見られているが、改善が図られていない対象者は、内的にも悲哀感、攻撃性が未解消となっている。ワークショップ参加者には、自助性が高まり自国民へのサポートが有効に働き始めていることが見いだされた。

研究成果の概要（英文）：The first purpose of this study is to examine how trauma of people who grown up in and experienced a war and a dispute influenced on their mental health as an adult and clarify the relationship between mental health status affected by long-term trauma experienced through a war and a dispute, and their violence, apathy and various problems related to a human relationship. We conducted semi-structural interview and sand play on war victims to grasp their mental status. We planned and have implemented a workshop, which educate people to be a support, continuously every year.
In the result, some of the subjects whose living circumstances have improved tend to recover mentality. On the other side, the subjects who have not seen any improbement in their circumstances tend to have a great despair and unsolved aggression. The workshop influences the subjects mental status positively and on establishment of their reciprocal support systems.

研究分野：臨床心理学

キーワード：戦乱・紛争　心的外傷　箱庭制作　体験の共有　ワークショップ　性被害女性

１．研究開始当初の背景

（１）研究着手のきっかけ

19世紀の末頃から、衝撃的な出来事が心身に及ぼす影響をトラウマと呼ぶようになった。（森　2005）当初、トラウマとなる出来事は、鉄道事故による大量の負傷者に生じたものがその最初といわれる。その後、近代兵器を使用した大規模な戦争に従事した兵士に生じた「戦争神経症」、ベトナム戦争から帰還した兵士に発生した心身の不調や自殺、離婚といった問題が生じ、何らかの対応を要する事態となっていった。そこで、戦争被害者である住民がいかなるダメージを受けているのか、さらにはそのダメージから回復するには、どのような対応が可能なのかといったことを検討することの必要性を強く感じ、研究に着手することとなった。しかし、戦乱地で研究を実施することに大きな危険性があることから、戦乱が一応終結し、渡航しても安全な地として、2002年に独立を果たした東ティモールを研究対象とした。また、東ティモール独立に日本のＮＧＯが関わってきたことで、研究実施に多大な協力が得られることもあり、2003年本研究を開始する準備が整い着手することとなった。

（２）対象国の概要

日本の南に位置し、2002年5月20日に独立を果たした東ティモールは、長い戦乱の中にあった。16世紀からポルトガルの植民地であったが、1975年独立を果たした直後、インドネシアの占領下となった。1999年8月に実施された独立を問う住民投票までの24年間に多くの住民が殺害され、女性への性的虐待が頻発した。住民投票直後の9月から、インドネシア軍が全土の約80%以上を破壊、多くの住民が殺害された。被災をのがれるため山地に避難した住民も多数みられた。2003年研究を開始した時も、家屋、インフラ、農地等が破壊されたままになっていた。次第にインフラが整備され、2014年には停電回数も大幅に減少し、道路の改修も進み「豊かな国土」が少しずつ実現されてきた。

（３）戦乱による被害状況

1975 年からのインドネシア支配時代、多くの住民は、突然の逮捕、監禁、拷問が頻発しただけでなく、食料不足による饑餓にもさらされてきた（文珠幹夫・高橋奈緒子・益岡賢　2000）。その結果、多くの子どもは親を失い、自分の親が殺害される現場に直面しただけでなく、生存の危険にもさらされてきた。多くの女性はレイプされ、時には余儀なくインドネシア軍人の子どもを出産せざるを得ない状況におかれた。その結果として生まれた子どもは親から見捨てられるといった事態も発生してきた。さらには、独立を問う住民投票後の殺戮、放火、家屋の破壊等により、住まいを無くし、生活基盤が根底から破壊されるといった事態に陥ることとなった。親が殺害される場面に遭遇した子どもや、母親や姉妹がレイプされている場に居合わせた子ども、家への放火などにより強い恐怖を経験した子どもたちの心的外傷（Trauma）を心理面、身体発達状況と健康面から継続的に検討してきた（「戦乱による子どもの心的外傷に関する調査研究」（科研費：基盤研究（B）(海外学術)平成 17 年度～平成 20 年度、研究代表者：文珠紀久野、課題番号：17402036）。孤児たちは心理的に深い外傷を受けていることが見出された（文珠他、2002）その後、生活の安定が次第に図られ、少しずつ身体・健康面に改善がみられてきた。しかし、心理面においては心的外傷が解消されず、不安を内在化させ、その結果対人関係や自己受容が阻害されていることが明らかになっ

てきた。今後孤児が成人した後に種々の心理的問題が生じる怖れを看過できない状況にあることが示唆されている(Monju&Monju 2008)。

予備的に数名の戦乱経験者へのインタビューを 2009 年 10 月に、箱庭作成を 2010 年 10 月の調査時に実施した。その結果、これまでの長く厳しい戦乱・紛争状態の影響が、今も心身に悪影響を及ぼしていること、面接や箱庭作成時に当時の経験を表出し、聴いてもらう経験に『心的外傷の軽減効果』がみられること、性的被害女性へのグループ・インタビューが、心的外傷の軽減と同時に、グループ・メンバー間に相互援助関係が形成されることにも遭遇した（秦野・文珠・宮林　2010）。

２．研究の目的

東ティモールにおける戦乱状態は、1975 年以来継続的に生じている。特に、ポルトガルからの独立を果たした直後、インドネシアの侵攻（1975 年）により厳しい戦乱状況に陥り、東ティモール国民への弾圧、拷問、女性への性的虐待、民家への放火等によって、生命の危険を伴う恐怖状態に陥ったといわれる（高橋奈緒子・益岡賢・高橋奈緒子　1999、2000）また、1991 年サンタクルス事件といわれる紛争では、弔いの行列への突然の銃撃、弔いに参加していた青年への拷問、それに遭遇した住民は強い心的外傷を受けたといわれている（高橋奈緒子・益岡賢・文珠幹夫　1999)。さらに、1999 年『独立を問う住民投票』後に生じた戦乱によって、過酷な生命危機を感じる恐怖体験を経験し、独立後においても 2006 年国内紛争から、自国民間に起きた恐怖体験と、東ティモール国民は幼少期から継続的に心的外傷を受け続けてきたのではないかと想定される。

そこで、本研究の主目的は、子ども時代に受けた心的外傷がその後の心理面に及ぼす影響を調査し、過去に受けた心的外傷の状況と最近頻発している暴力、無気力、対人関係に関する種々の問題との関連を分析検討することである。心的外傷を負った人達への言語による治療的アプローチの可能性を探ることが第２の目的である。言語化しがたい経験であることを踏まえ、非言語的表出を図る箱庭作成を通して、緩やかな継続的関わりの効果を検討することが第３の目的である。第４の目的として、長期にわたる支援の必要性を考え、治療的アプローチに従事できる人材育成への可能性を探索することを通して、住民相互の援助体制構築を形成する素地を見出すことである。

３．研究の方法

（１）研究実施国：東ティモール共和国

（２）研究方法

①面接調査及び箱庭制作

・対象者：戦乱被害者　56 名（男性２６名、女性３０名）

・方法：

ｉ　インタビュー：１対１の個別（通訳を介して）での半構成的インタビュー方法で実施した。インタビュー内容は、生育歴、戦乱当時の行動や生活状況、現在の生活・心身の健康状況等である。

ii　箱庭制作：内的心理面の状況を把握するために、箱庭制作を実施した。自由にミニチュアを使って作品をつくり，その後何を制作したか、制作中の気持ちをインタビューした。

②性被害女性へのインタビュー

ｉ　対象者：性被害女性　17 名、性被害女性支援スタッフ　7 名

ii　インタビュー：支援スタッフには、支援の具体的状況、支援上感じる困難や問題点等をインタビューした。性被害女性には、性被害状況、それに伴う感情状態等をフラッシュバックが起きないよう、慎重にインタビューした。

③グループ・面接

・対象者　11 名

・４～５人の小グループで、自分の人生をふりかえり線で表現することと、風景構成法を実施した。それらを使って自分の体験を語り合うグループ・面接を行った。

④支援者養成のためのワークショップ

・2012 年度　3 回　（1 回目　トラウマについて、2 回目　心の理解と箱庭療法入門、3 回目　感受性を磨くエクササイズと箱庭制作）

・2013 年度　2 回（1 回目　PTSD の症状と軽減方法、自分の人生をふりかえる，2 回目　傾聴）

・2014 年度　2 回（1 回目　トラウマ体験の分かち合い、　2 回目　風景構成法と箱庭用ミニチュア制作）

４．研究成果

（１）戦乱被害者へのインタビュー

戦乱・紛争中に生まれ、成長してきた対象者へのインタビューにおいて、生活状況―特に経済状況が改善されつつある対象者は、心身の健康がかなり回復してきている。反面、仕事が無く貧困状況にある対象者は、過去のトラウマからの回復がなかなか図れないままに陥っていることが見いだされた。内的に攻撃性を抑圧し、悲哀感や虚無感が残存していることが示唆された（文珠　2011）。特に、独立闘争に従事し、十分な教育を受ける機会を失った対象者は、仕事を得る機会に恵まれず、貧困状況に陥ってしまうという問題も残されていた。

（２）DV 被害女性へのインタビュー

①DV 被害女性への支援スタッフ

現在、DV 被害女性が増加しつつあることが問題であると言われている。そのために、被害を蒙った場合の避難方法の確立、シェルターの整備、加害者への対応が徐々にできつつあることが見いだされた。シェルターにおいては、被害女性への生活面、経済面への支援が実施されている。しかし、DV 被害によって受けた心的外傷への軽減方法が見いだせないことへの苦慮、DV 被害女性間のトラブルへの対処が問題として上がっていた。

②DV 被害女性

夫に経済力が無いこと、夫自身がかつてのトラウマから十分回復していないこと、子どもへのしつけに体罰が用いられ、自分のいうことを聞かせるために暴力をふるうことに抵抗感が薄いことが、DV をもたらす要因では無いかと述べている。シェルターで保護される中で、徐々に心身の健康を回復できてきていること、裁判によって自分が守られることを知り、安心感を得ていると述べている。

（３）グループ面接

①経験の分かち合い

参加者相互に経験を分かち合い、トラウマ軽減を図るグループ面接から、自分の経験を受容的に、共感を持って傾聴されたことから、非常に大きな安堵感を得たと思われる。これまでかつての辛い経験を語り合う機会がなかった参加者にとって、グループ面接は非常に新鮮で豊かな体験となった。

②風景構成法からみえるもの

風景構成法からは、内的エネルギーが豊かにあるけれど、時としてエネルギーがほとばしることを予感させている。十分に自分の内的感情がコントロールできているとは考えられず、きっかけがあるとそれが破壊的衝動として出現することも考えられる。また、対象者の不安が解消されないままであること、不安が常に潜んでいることが見いだされた。さらに、ダイナミックな活動力をみせているが、なすすべも無い自分を表現している状況でもあった。

（４）支援者養成のワークショップ

2012 年度から 3 年間にわたって、戦乱被害者への支援ができる支援者養成を図ってきた。合計 7 回のワークショップを通じて、トラウマとは何か、トラウマによって生じる症状や行動・反応の理解が進んだ。また、心の働き、構造や機能といった臨床心理学の知見に触れ、新たな学びへの意欲を喚起できた。参加者が今ここで箱庭制作の実施、自分の人生のふりかえり等を通して、自分自身が抱えていた問題に向き合い、軽減が図ることができた。参加者相互のネットワークが形成され、相互援助関係が構築できた。

（５）研究成果のインパクトと今後の展望

戦乱・紛争地での住民は、計り知れないほどの健康被害と共に心的外傷に苦しめられていることが見いだされた。その事実が本研究を通して明らかとなったことは、トラウマ研究に大きな影響を与えることになると思われる。本研究を元に行った中高生への「ひらめき☆ときめきサイエンス」(2012, 2013, 2014 年実施）において、平和を創り出すことへの強い希求を喚起できたこともあった。戦乱・紛争によって被害を蒙り現在もそのトラウマに苦しんでいる住民－特に子どもや女性－に対し、トラウマ軽減、解消に寄与できる方策をさらに見いだすことが急務であると考えている。攻撃性、恨み感情、無力感といった内的に未解消となり、抑圧されやすい感情への解消法として、箱庭制作や風景構成法といった非言語表現の有効性が見いだされたことから、それらを活用した住民対象のワークショップを実施し、その有効性をさらに検証したいと考えている。心的外傷は世代を超えて問題となるといわれている。連鎖を防止するだけでなく、自国民が自国民間で相互に援助できるための体制を確立する方策が見出され、発達途上にある子どもの心身の安定と、今後の子どもたちの発達・育成に貢献したいと願っている。

＜引用文献＞

秦野環・文珠紀久野・宮林郁子：国内暴動時の女性に対する暴力－ケニア選挙後暴動時の状況、予防策構築に向けての取り組み、第 17 回日本災害看護学会、2010。

文珠紀久野、文珠幹夫、Mariafe：東ティモールにおける　戦争孤児への心理的支援　－インドネシア支配からの解放時の混乱から発生した戦争孤児の状況調査、山梨県立大学紀要、4 巻、63－70、2002.

Monju Kikuno, Monju Mikio：Impact of war on children: a survey of war orphans in East Timor、World Association for Infant Mental Health,2008.

文珠紀久野：心的外傷を負ったケース－東ティモールにおける戦乱被害者の箱庭作品、第 2 回日本箱庭療法学会全国研修会　2011。

文珠幹夫、高橋奈緒子、益岡賢：東ティモール２、明石書店、2000.

森茂起：トラウマの発見、講談社選書メチエ、2005.

高橋奈緒子、益岡賢、文珠幹夫：東ティモール、東ティモールに自由を！全国協議会、1999.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

①文珠紀久野：グループ・カウンセリングを通した紛争 Trauma ケアの試み, 季刊東ティモール, 55,2-10,2014.（査読無）

②文珠紀久野, 秦野環・文珠幹夫・中村葉子：戦乱・紛争による心的外傷軽減のための支援-東ティモールにおける支援者育成のためのワークショップ報告（１）-, 山梨県立大学看護学部紀要, 15 巻 1 号, 45-54, 2013.（査読有）

〔学会発表〕（計　2 件）

① 文珠紀久野：フォーラム III「東ティモール～破壊からの復興･開発と保健」紛争による心理的問題－インタビューを通してみえてきたこと, 第 28 回日本国際保健医療学会, 2013.「名桜大学（沖縄県名護市）」

② 小尾栄子, 文珠紀久野･伏見政江：東ティモール孤児院における保健ワークショップ, 第 27 回日本国際保健医療学会, 2012.「岡山大学(岡山市)）

〔その他〕

①文珠紀久野：希望をつなぎ、架け橋を育む-東ティモール支援を学ぶ一日講座-, 大学広報誌（tobira), 24, 5-6, 2014.

② Monju Kikuno:Japanease Psychologist

Challenges Timorese Trauma,TEMPO SEMANAL,P7,2014.10.1.
③文珠紀久野：私の活動ノート－東ティモールにおける調査研究，看護学部広報誌（Harmony），2号，9－11，2011.
URL:www.yamanashi-ken.ac.jp/wp-content/uploads/harmony_2011_02.pdf
④文珠紀久野：心的外傷を負ったケース－東ティモールにおける戦乱被害者の箱庭作品－、山梨県立大学学術フォーラム、2011．6.

６．研究組織

（１）研究代表者
文珠　紀久野（MONJU Kikuno）
山梨県立大学・看護学部・教授
研究者番号：７０１９１０７０

（２）研究分担者
秦野　環（HATANO Tamaki）
聖マリア学院大学・看護学部・准教授
研究者番号００３５２３５２

亀山　恵里子（KAMEYAMA Eriko）
奈良県立大学・地域創造学部・准教授
研究者番号：５０５９８２０８

（３）連携研究者
無し

（４）研究協力者
文珠　幹夫（MONJU Mikio）
中村　葉子（NAKAMURA Yoko）